

大阪が好きで嫌いだった司馬さん

高島 幸次

「愛の反対は憎しみではなく、無関心である」と言ったのは、ユダヤ人作家のエリ・ヴィーゼル（一九二八―二〇一六）だが、それを敷衍した謂いが、「好きの反対は嫌いではなく、無視である」なのだろう。

この表現に習えば、司馬さんは大阪を「無視」できないほどに、「好き」で「嫌い」だったのだと思う。司馬さんが大阪について語るとき、いつも独特の揺らぎを伴うのはそのせいに違いない。ごく初期のエッセイ「大阪バカ」（一九六〇年）で、司馬さんは大阪人を酷評している。

封建的節度がないために、江戸時代から江戸者にきらわれ、今日でも汽車のなかや喫茶店の店内などでその封建的節度のなさ、他国の人のめいわくになっている。三百年の伝統とはいえず、その社会的感覚の奇妙さは一種のバカというほかない。

この前段に大阪人の無節操さの具体例を挙げてはいるものの、それにして「一種のバカ」とは手厳しい。司馬さんは続ける。

私も代々のバカの家になれバカの土地でそだち、生涯この土地で住みつけようと思っている。たまたま時代小説をかいているのだが、自分のあいだは自分が飽いてしまうまで、大阪者の野放図な合理主義精神が、封建のジャングルのなかでどう反応するかを、面白おかしく書いてゆきたいと思っている。

このエッセイから四半世紀後に発表された「大阪の原形」（一九八七年）は、副題に「日本におけるもつとも市民的な都市」と謳っているの

で、大阪賛美の散文かと思いきや、その冒頭から裏切られる。司馬さんは生まれてから六十四年も大阪に住んでいるため「よほど大阪がすきなんです」と言われても、「そうでもない」と一蹴し、

大阪が好きか、と問われれば、返事にこまるのである。私は自己に対して嫌悪感からまぬがれたことが一度もないため、

「きらいです」と、一応は答えざるをえない。

このように大阪をすげなくあしらう。しかし、この後の本文に入ると、大阪の誇る歴史的な原形を列挙するのだ。別稿「大阪」（一九九一年）においても、「商品経済が、地域で蒸溜され、思想化した」ため「十八世紀の大坂にはすでに近代の萌芽があった」と高く評価する。

「大阪バカ」の前年に発表された「大坂侍」（一九五九年）では、親の代に親類の罪に連座して江戸を離れ、大坂町奉行所同心となった鳥居又七を主人公に据える。大坂で二代目という設定は、彼にはまだ野放図な合理主義精神が備わっていないことを匂わせ、結果として、又七が江戸と大坂の価値観の間で揺らぐことの伏線にもなっている。

又七は、武士の義を通すために新政府軍と対峙した会津藩の武士が「欲にも得にもならぬことで、命を落そうと意気まいてる」ことを高く評価し、それを「阿呆だんな」と茶化されても、「その阿呆が人間の美しさだということが、金に目のくらんだこの土地（筆者注：大坂）の

奴らにはわからん」と云い捨てる。

やがて、又七は江戸の彰義隊に入隊するが、隊員たちから厳しくあたられ、その剣の流儀までもバカにされると、思わず反論する。

「流儀とか生地とか、とかく江戸の武士が口を開くと虚栄事が多うござるな。この又七は大坂で育ち、かの地の町人の中で暮らしたゆえ、男の言葉というものは実力以外にない、ということを知らされて参りました。かの地の商人の世界では、甲斐性のあるなしが、男の格付でござるよ」

又七は「いつのまにか、心のうちで大坂へ激しい郷愁を抱きはじめている自分に気づいていた」のである。この又七の「嫌い」だが「好き」の揺るぎは、司馬さんに似ている。

この短篇には、生粋の大坂人も登場する。金で剣術の免許を買った渡辺玄軒だ。もちろん、その腕前は当てにならない。玄軒は、四天王寺の亀ノ池辺りで遊人たちに絡まれていた町屋の娘を助けるために金で仲裁しようとするが、逆に袋叩きされそうになる。司馬さんは、この玄軒を踏まえて、「大坂では、こういう、世を茶にして送っている人物を気儘人と名づけて、異様に尊敬される。儲け仕事にあくせくしている商人たちの、いわば理想像なのだろう。」と説く。「大坂侍」と題しながら、玄軒のような生粋の大坂侍ではなく、まだ大坂で二代目ではない又七を主人公に据えたところが司馬さんらしい。

玄軒の助太刀に入ったのは、少年のころに玄軒に剣術の手ほどきを受けた又七だ。又七が遊人たちを懲らしめるのを見届けて、玄軒は次のようにえらそうに吠える。

「どうじゃ。わかったか。この仁（筆者注：又七）は、わしの弟子やぞ、これからもわしと喧嘩してええもんか、とつくり、そこらの亀と相談してみなはれ」

玄軒の大阪弁には「世を茶にして送っている人物」の思考が漂って

いる。そういえば作家の網淵謙錠さんは、司馬文学の思考法の根底に大阪弁があると喝破していた。

谷崎（筆者注：潤一郎）は関西弁を駆使しながらも、東京弁で物を考えていた。また川端康成をはじめ関西出身の作家は沢山いたが、そのほとんどが近代思想や西欧的論理は標準語で考えていた節がある。

ところが、「司馬さんは）何のぎこちなさも与えずに、大阪弁で近代的思考法の脈絡を一貫させてみせましようといっている感じだった」というのだ。司馬さんに大阪弁の小説は多くはないが、その全作品は大阪弁の思考で書かれていたのである。言語は思考なのである。

司馬さんは講演「大阪人について」（一九六六年）で、「大阪にいることが私の仕事のために必要なことは少しもないので、私の仕事には出版社の多い東京にいるのがあたりまえ」と言いながら、「一生大阪にいるつもり」だと話していた。その理由を推測して、東京の文壇と距離を保つためとか、東京一極集中への批判とみる向きもあるようだが、それらは後付けではない。デビュー翌年の「大阪バカ」において、すでに「生涯この土地に住みつけよう」と書いていたのだから。では、なぜ司馬さんは大阪を離れなかったのか？

すでにネタバレしているが、私は、司馬さんが大阪を好きで嫌いだったからこそ、大阪を離れられなかったのだと思う。そうすること、大阪弁による思考が一層磨かれることまでも、司馬さんならお見通しだったはずだ。

大阪バカは大阪でしか暮らせないとはいわれないが、司馬さんのように大阪が好きで嫌いなために大阪を離れられない大阪人は少なくない。私もその一人である。

（たかしま・こうじ＝龍谷大学REC顧問、大阪天満宮文化研究所所長。専門は日本近世史および天信信仰史。著書「奇想天外だから史実―天信伝承を読み解く―」など）

*5「大坂侍」講談社文庫新装版の270頁 *6「大坂侍」の295頁 *7「大坂侍」の262頁 *8「大坂侍」の263頁 *9「大阪弁で物を考える」『司馬遼太郎全集27』文藝春秋の月報20の4頁 *10「大阪人について」『なにわ拾遺』第四集の81頁

（注）*1・2「大阪バカ」司馬遼太郎が考えたこと1）新潮文庫の137頁 *3「大阪の原形―日本におけるもつとも市民的な都市」『十六の話』中公文庫の216頁 *4「大阪」『この国のかたち三』文春文庫の201・202頁